

「知識」と「勇気」と「仲間」を

貧困化社会に生きる若者たちへ

田中 祐児

民主教育研究所

「職場」に 育てられて35年

今年の三月で私は定年退職になりました。1974年以来、川越養護学校、川越農業高校、新座北高校、そして最後に朝霞西高校に勤務してきました。

大学卒業後、偶然に配された川越養護学校では、当時、「養護学校就学義務化」の動きのただ中にあり、故山田牧子さんをはじめとする若い同僚たち、埼玉教壇教育部、全障研の運動に実に多くのことを学びました。特に、「人間発達の理論」や「学校に合う子どもを選ぶのではなく、

子どもたちの必要に合わせて学校をつくる」という理念、憲法の「その能力に応じて等しく教育を受ける権利」という教育権思想にはじめて触れました。ほんやりと教員になってしまった私にとっては新鮮で衝撃的なことでもありました。

1978年からの川越農業高校では、学力問題と授業（社会科）の成立、生徒の自治活動の可能性を探る期間でした。この時期より、全国民主主義教育研究会に参加してきました。「主権者を育てる」をスローガンに掲げたこの研究会はとも魅力的で、全国各地で創造的な教育実践を切り開いている先生方にたくさんのことを教えてもらいました。

1982年からは開校間もない新座北高校に転動しました。それは「職場づくり」を意識した13年間でした。多くの若い先生方とともに、よく議論し、よく遊び、いくつもの読書会、学習合宿などで学びあうという、実に愉快で充実した期間だったと思います。

その後、今年3月まで朝霞西高校に勤務してきました。教職員や生徒自身の「意見表明」の方法をあれこれと模索してきた14年間でした。授業で「書き綴る」ことにこだわり続け、生徒たちの思いがけない「豊かな表現」にたくさん出会い、毎週発行の学校便り「週報」を担当したりして、同僚たちとの信頼関係も大いに楽しんだものです。

しかし、実はこの十数年間、教育現場は矢継ぎ早に押し寄せる強圧的「教育改革」に対して、脈絡の見えにくい個別の対応に追われ続けてきました。入試への面接導入、新学科やコース制導入などの多様化路線の進展、「いきいきハイスクール構想」と高校統廃合の進展、二期制導入、あれやこれやの「改革」のラッシュ。近年、しだいにその構造全体のアウトラインが浮き彫りになってきました。一連の規制緩和、「全国学力一斉調査」

の実施、学校と教職員の評価システムの稼働、教育基本法の「改正」、奇怪な教員免許更新制強行、さらに雇用の不安定化と子どもたち・若者たちの貧困化、9条の危機と25条の空洞化……、教職員の教育的努力のすべてを「競争的评价システム」が徐々にとりこみつつ、いつの間にかグロテスクなばかりの凶暴な競争社会システムが立ち上がっていました。

「なすすべもなく、ただ落ちる」

「『働く』ということは、私の思っていたよりも悲しい色をしていたみたいだ。これまで私は、働くことはもつといいものだと思っていた。しかし、『将来の夢』という言葉が持つ輝きが、あまりにリアルからかけ離れていた。『夢』や『個性』を持ってと言われ続け、またそれを後押してきた私たちのゆとり教育制度は、これからもワーキングプアを増大させる日本の社会を暗示しているようではない。

……現代社会の授業を通して、私が気づいたことは、シリアスな、しかし本当の社会の『真実』であった。これほどま

でに社会機能も発達して、豊かな社会だと思っていた日本に、眼をこらせばたくさん貧しい人たちがいたことに気がついた。

彼らもきつとこんなはずではなかったのだろう。夢見ていた理想の階段が一気に落とされ、穴に変わったとき、私たちはなすすべもなく、ただ落ちる。助けてくれる人もいなければ、助かる方法もないと知った。その瞬間に社会は残酷に変色した。」

この文章は、3年生必修の「現代社会」の授業で、昨年度（08年）12月に書かれた小論文「ワーキングプアを考える」で、ある女子生徒が書いたものです。彼女自身、家庭状況の急変によって大学進学希望が揺らいでいたと聞きました。

毎朝の教科通信 「現代社会のとびら」

私は長年政治経済や現代社会などの公民科の科目を担当して行く中で、高校教育に要求される公民科の学力水準とは、「新聞」をそれなりに読めるだけの言語力と社会的知識ではないだろうか、やや乱暴に確信するようになってきまし

た。

昨年度までの最後の三年間、「現代社会のとびら」と題する教科通信を毎日発行してきました。これは、18歳の3年生にふさわしく、現実の社会とのリアルな接点を拡大する方策として設定したものです。日々発行される各種新聞の中から、数人の現代社会担当の教員が生徒にとって重要だと思われる記事を選び、B4版の用紙に切り貼りし、囲みや傍線を引き、コメントを書き込んだものです。担当教員がローテーションで数日に一回作成し、担任を通して毎朝配布します。生徒たちは諸連絡を受けつつ、配布された「現代社会のとびら」を毎日ちらっとでも見て、ファイルに綴じ込みます。時に、担任の先生が「今日の『とびら』はよく読んでおけ」と声をかけてくれたりします。定期考査の時に、時事問題として試験範囲に入れることにしているので、授業日数分ためたファイルを試験前には復習し、さらに、就職試験や大学入試の面接前には、そのファイルに目を通してから臨むことになるのです。

この取り組みの特徴は、まず、毎朝必ず何かしらのニュースに接し、いやでも見出しぐらいは眼に入ることです。ラン

ダムに提示される記事なのですが、毎日続けると自然に社会変動の特徴が浮き彫りになってくるものです。昨年度は当初からすごいことになりました。「サブプライム・ローン」「秋葉原無差別殺傷事件」「蟹工船」「名ばかり管理職」「首都圏青年ユニオン」「リーマン破綻」「世界金融危機」「株急落」「オバマ圧勝」「ビッグ3の危機」「派遣切り」「内定取り消し」「負のスパイラル」「年越し派遣村」など、この時代の異様さを切り取る見出しが続出したのです。

また、複数の教員で取り組んできたのがミソです。なぜか、数日に一回というテンポが実に良いのです。しかも各教員の関心が異なっているのです。ある教員は国内政局中心、もう一人はアメリカの大統領選や国際紛争、別の教員はスポーツネタ、私は雇用問題や貧困問題を取り上げがち、といった具合です。この幅の広さと乱雑なバランスに特徴があります。

しかも、この取り組みのメリットは、作業が実に安易で短時間でできることです。そもそも単なる新聞記事の切り貼りにすぎません。いろいろな新聞から「面白い記事」を探すのも楽しいものです。選んだ新聞記事を適当に貼り付け、適当

なコメントを数行入れて、ハイできあがりです。320人分印刷をして、各クラスのリターケースに放り込めば、翌朝、自動的に3年生全員の手に渡ります。

3年間続けているうちに、「家で新聞をとっていないからとても助かってます。」など言い出す教員もいて、職員室内での定期購読者も増えてきました。面白い記事はコピーで増刷され、以前はあまりなかった政治や経済の問題が自然に職場の話題となってきます。

この「現代社会のとびら」は、その偶然性が面白く、毎朝発行というルーティンが生徒の生活習慣となり、バックナンバーをそろえるという蒐集癖もさそい、ひよつとすると大学入試にも役立つかもしれないという実利も期待できるのです。3年間、授業日（定期考査中を除く）一日も欠けることなく発行され、年間110号以上、分厚いファイルができてあります。

ところで、朝霞西高では、一般の商業紙が各教室に配布されています。新聞購読率が急速に低下しているなかでの業界の対策でもあるのですが、「新聞販売協会」が2004年から「すべての教室に新聞を」という運動を始めています。希

望する小中高の学校に、「読売・朝日・毎日・日経・産経・東京・埼玉」の主要新聞がクラス分毎日届けられ、各ホームルームに持ち込むことができます。タダです。

ちなみに、現在、この運動に応募している学校は、東京都23区で、小学校101校、中学92校、高校1校。埼玉県では、小学校1校、中学1校、高校15校にすぎません。微々たる学校数に限られているのです。買えば、新聞は一部100円、140円。高校で、24クラスとすると、年間数十万円の新聞が各教室にサービスされます。大変お得で、しかも有益です。毎朝、当番の生徒が、新聞一面の見出しなどを見ながら教室に向かっていく姿は、なんとなく文化的な雰囲気があり、なかなかいいものです。

「知識」と「勇気」と仲間

先日、卒業生H君が訪ねてきました。現在大学4年生。高校3年生の時、私の「現代社会」の授業を受けていた男子生徒です。彼は会うなり、「先生の授業、役に立ちましたよ。」と切り出してきま

した。こんな話でした。

日君は数年前からあるマイナーなコンビニエンスストアでアルバイトをしていたのだが、昨年、突然コンビニのチェーン本部から電話とファックスで「閉店」の連絡が入り、一ヶ月後、店長とスタッフ十数名全員解雇の通告を受けました。近隣に別のコンビニができて、売り上げが落ち込み始めていたというのが主要な理由だそうです。

まず日君は店長に有給休暇の申請をします。多分彼はバイトにも有給休暇が付与されることを思い出したのでしょう。ところが店長は「この会社には有給休暇の制度はない」というのです。そこで、日君は高校時代の「現代社会」の授業を復習をし、労働基準法やパート労働法を示して店長を説得しました。店長はまず自分がエリア・マネージャーに年休の申請をしてみたら、可能だということになったので、スタッフ全員に有給休暇請求権があることを伝えたそうです。誰も有給休暇のことを知らなかったそうです。スタッフ全員分の有給休暇を本部に申請したところ、こんどは閉店の日程を前倒ししてきたそうだ。そこで、彼は、市の「労働相談」にも連絡し、解雇予告手当

の支給と、ついでに労働時間を15分単位で積算していたのを、一分単位の計算にし直すことを要求（これはマクドナルドの事例を授業であつかっていた）し、対応をしる本部に対して法令を提示してやりとりを繰り返したそうです。

ついに会社本部から幹部がやってきて、労働相談員の立ち会いの下、店長を含めて全スタッフで交渉し、法定相当の年次有給休暇の取得、労働時間の再計算による差額賃金の支払い、解雇予告手当の支払い、有給休暇未消化分の買い取りを実現した。日君の約14万円をはじめ、店長とスタッフ全員で総額200万円ちかくの支払いを実現したというのだ。仲間のスタッフ（高校生や大学生）はもとより、雇われ店長の年配の女性にも大変感謝され、とても仲良くなったといいます。

話を聞いて、私が「君、すごいじゃないか。やるねえ！」と言うと、「現代社会の授業のおかげです。何も知らなかったら、タダのクビで終わってますよ。」と、いかにも誇らしげな表情で語るので

「知識がなければどうにもなりません。労働者の基本的な権利をしっかり学べ

ば、自分が不当・不法な扱いを受けていることにはじめて気づきます。でも、気づいただけでは、惨めな思いをするだけで、どうにもならない。そのことをきちんと主張し、要求する『勇氣』が必要です。でも勇氣だけでは多分無視されるでしょう。力がないからです。実は一緒に行動できる『仲間』がいて初めて力になります。『知識』と『勇氣』と『仲間』が大切なのです。」こんな話を授業の最後に語ったような覚えがあります。

日君は見事に「知識」と「勇氣」と「仲間」を形成していました。愉快そうに経緯を要領よく語る彼を見ながら、ささやかだけれども、35年間の教職生活に餞をもらったような気持ちがありました。